

大阪商業大学学術情報リポジトリ

東大阪市芸能文化遡源

一河内の文化力に関する歴史的考察の一環として一

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2021-11-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石上, 敏, ISHIGAMI, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1076

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



東大阪市芸能文化溯源

―河内の文化力に関する歴史的考察の一環として―

石 上 敏

- 一、はじめに
- 二、玉櫛と能
- 三、池島と漫才
- 四、境界としての玉櫛
- 五、今里―もうひとつの境界
- 六、近代への架橋―河内音頭
- 七、おわりに

一、はじめに

昭和四十二（一九六七）年の市政施行以来五十余年、東大阪市は市政施行七年後から五十二万人台を十六年続けたあと、一九八〇年代末から二〇一〇年代にかけて毎年それぞれ二万人を超える転出・転入人口のバランスによって人口五十一万人台を十七年間、次いで五十万人台を十一年間続けた。そして平成二十九（二〇一七）年に至って人口は五十万人を割り、減少幅を増減させながら減少を続けている¹⁾。ちなみに、市政施行の一九六七年とは日本の総人口が一億人を突破した年であった。その後、約一億二八〇八万人を最大値として、日本の

総人口が減少に転じたのが平成二十（二〇〇八）年であった。東大阪市の場合、昭和五十九（一九八四）年の人口約五十二・六万人をピークに減少傾向に転じているのは、いわば全国的な趨勢を二十年以上先取りしたことになる。^②

日本全国を覆う少子化・高齢化の中、御多分に漏れず人口減少を続ける東大阪市は今後どのような発展の構図を描くことができるだろうか。その鍵となるのは「文化」において他にないと私は考える。それは、この地域が歴史的に見て大阪市に勝るとも劣らぬ、それどころか日本でも稀有の文化集積地であり、いわば文化的潜在力に満ちているからにほかならない。^③

本稿では、この地域に多種多様に存在する文化事象の中から、特に芸能に焦点を当てて、歴史的に東大阪地域（かつての中河内郡の北部）がいかに深く芸能とかわつてきたか、その一端を考察していきたい。

二、玉櫛と能

東大阪市の南側を、西から東へと宝持・玉串・池島、さらに六万寺・瓢箪山と続く一帯は、歴史的に見て日本を代表する「芸能の里」である。わたくしに「芸能ロード」と呼ぶこの一帯には、中世（おそらくは古代）から近現代に至る芸能、言葉を変えれば文化の稀有な潜在力、すなわち「文化力」が存在する。その先（東端）にある生駒山については近時まとめて考察したので、ここでは先ず玉串（本来は玉櫛）について見ておきたい。^④

ここは観阿弥の母、そして世阿弥の祖母の里であると伝えられてきた（上嶋家文書等）。^⑦しかし上嶋家文書の信憑性については、かねてから議論が絶えなかった。それを一旦収めようとした梅原猛氏の『観阿弥と正成』^⑧も、表章氏の『昭和の創作「伊賀観世系譜」——梅原猛の挑発に応えて』^⑨によって反駁が加えられ、議論が終結したとは到底言えない状況が依然として続いている。

ただし、玉櫛という地が漂泊者にとっても定住者にとっても「芸能の里」となるべき契機に満ちていたという歴史的事実によって、ここが観阿弥の母親の故郷であっても何の不自然もないことだけは改めて記しておきたい。従来の議論はもっぱら上嶋家文書の真偽に集中していて、玉串（玉櫛）の検討があまりにもなおざりにされてきたと言わざるを得ないからである。^⑩

玉櫛の文化的潜在力の源泉となったのは、弥生時代以来の朝鮮半島系渡来民による芸能の伝統であったが、そのような来歴に照らせばなお

ここが観阿弥の母の里であったという「上嶋家文書」の検討は必須のこととなる。かねてより一部では注目されてきた史料であるが、近年に至って、「上嶋家文書」の価値を再評価すべきであると論陣を張ったのが、梅原猛氏の先著『観阿弥と正成』であった。

梅原氏の論点は、大きく分けて二つある。①に「上嶋家文書」は「復権」されるべき史料であり、②として正成の母も観阿弥の母と同様に玉櫛庄の出身ではなかったかという推論である。本稿で重要なのは無論①であるが、②をも適宜視野に入れつつ梅原論を再検討したい。

梅原氏は、『太平記』巻三「主上御夢事 付楠事」の「其母若カリシ時、信貴ノ毘沙門二百日詣デ、夢想ヲ感ジテ設タル子ニテ候トテ、稚名(幼名)ヲ多門トハ申候也」という一節に注目する。これは、かつての莊園(玉櫛庄)が持つ力と、その重要性を示唆する一文でもある。平等院の莊園であった玉櫛庄は、南北は現在の八尾市から東大阪市にかけて、東西は生駒西麓から平野部にかけて広がっており、現在もなお一部に条里制の跡を明瞭にとどめている。また玉櫛庄の領地は河川(旧大和川水系)の水運によって、河内のみならず摂津や大和とも緊密に結ばれていた。むしろ、水運の便をあてにして拓かれた莊園であったといえる。¹²⁾

楠木正成の母(上嶋家文書によれば、観阿弥の母の姉妹)が信貴山朝護孫子寺の毘沙門天に百日詣をして、その加護によって生まれたのが正成であったという『太平記』の記述は、彼女が住んでいたのが玉櫛であるということ、より現実性を持つはずだというのが梅原氏の意見であった。この点に関しては十分な説得力があり、表氏をはじめ、誰にも反証されていない。

観阿弥の母は、「観世系図」(上嶋家文書)に「河内国玉櫛庄の橘・入道正遠の女」と記され、「観世福田系図」(同前)には「河内国玉櫛庄の橘・入道正遠の女」と記されている。¹³⁾いずれも「河内国玉櫛庄」であることは変わらず、正遠が「橘入道」か「楠入道」かという小異はあるが、かつて「源平藤橘」と呼ばれた武士の代名詞の一角を占める「橘」氏は、他の三氏と同様に多くの武士たちに僭称された。正成に代表される楠木氏が「橘」を名乗ったことは事実であり(それが「本姓」であるか否かは別の問題として)、「橘入道」と「楠入道」とは同一人と見て問題はない。¹⁴⁾

また、ここで思い返すべきは、玉櫛明神(津原神社)創建の縁起に登場する「櫛」と「橘」である。「櫛」については、現実に川の名称ともなっており、この地域に地名として定着した「物」であるから問題はないとしても、その櫛(櫛箭)とともに流されたのが橘であったことには疑問が持たれた。しかし、流された(神意を卜すために選ばれた)のが橘であったならば、それは橘氏をおいては語れない。¹⁵⁾

能楽(猿楽)の本家である金春家が、今に至るまで秦河勝の子孫を標榜していることは、ひとつには「川の民」との関わり、さらには機織民との関わりを考えるうえで見過ごせない。「秦河勝」とは、まさに機織民と川の民という渡来人としてのこの一族の職掌を表徴した名、そ

の氏族を代表する名であった。金春家の能楽座は大和に四座が存続している他に、近江に三座、丹波に一座、そして摂津に二座があったとされる。^⑮その分布域に照らして、「川の民」とともに展開したと見るのが可能であろう。

拙稿「古代以前の河内」に述べたように、祭神が不明瞭であるという極めて珍しい祭事「七夕」と機織民との関わりには注意を要する。^⑰当初は、「乞巧奠」と呼ばれる中国伝来の針仕事の上達を願う祭事（催事）であったものの、日本に入ってから機織民を意識した女性が登場し、後れて農耕民の象徴である男性が登場して、機織と農耕という当時の二大産業の合体によって生産性の昂進を願うという、生活観を反映した「星祭」へと変遷してゆく。

「天の川」を舞台とした物語は何より「川の民」の関与をうかがわせ、日本に入って登場した機織を職掌とする女性に機織民の関与をうかがわせるに足る。その両者が同じ一族（渡来人）であったとすれば、日本では極めて稀少な星祭が秦氏の関与によってなされたことを類推させる。また、日本では稀有な星への信仰もしくは親炙（伝承・物語の体系）が、河内北部の交野地域に特に色濃いの、この氏族の居住地であったことと符合する。^⑱

梅原氏は「林屋（辰三郎）先生の仮説は、『太平記』に見える楠河内入道を、播磨から摂津・河内を経て大和（奈良）にいたる水陸の通路に勢力をもった河内の土豪であり、摂関家の散所長者であった可能性がある」（五〇頁）という朝尾直弘氏の所説^⑲を引いて、「玉櫛庄は河内国河内郡にあった摂関家領から室町幕府の御料所まで続いた由緒ある荘園で（中略）大阪から東へ向かい生駒丘陵に突きあたるあたりの島と陸地を包括した荘園であった。（中略）正成の本拠を千早・赤阪の山中から、人と物資の情報の輻輳する大阪平野の真ん中へ引っぱり出し、商工業や水陸交通を掌握する新しい在地領主像を提示していた」（五一頁）と述べている。

「大阪平野の真ん中」という言い方が、はたして妥当かどうかは別にして、^⑳正成の拠点が長くそう信じられてきた千早赤阪ではなく玉櫛であったという視点は斬新であり、ある意味で正鵠を射ている。そして、ここでは「島と陸地」という表現にいささかの説明が必要であろう。当時この地域に住む人々は、まさに「河内」の名の通り、幾本もの大河によって挟まれた内側の土地に暮らしていた。中には大河の洪水のたびに氾濫原の中に浮かぶ「島」のように見えただけに、たとえば「池島」と呼ばれ、その名を今に伝える場所もある。約五千年前まで大阪湾が生駒山麓まで陥入して「草香江」（河内湾）と呼ばれていた河内（中河内）は、のちに「河内潟」を経て、約二千年前に河道はいったん落ち着く。残る湖沼が「勿入淵」（内助が淵）や「三箇」（新開池）などと呼ばれていたこの辺り（現在の柏原市北部から八尾市・東大阪市・大東市にかけて）には、「○島」「○江」などという当時の地形の名残りと言える地名が数多く残っている。^㉑

続けて、梅原氏は林屋辰三郎氏の所説を引用する。⁽²²⁾

「さて本書のなかで楠木正成の故郷について述べたが、正成の父が正遠とよばれていたことは、他の史料でも論証されており、河内国玉櫛荘を本拠としていたらしいことも、その後の研究のなかで推測されている。そして楠木氏は、播磨から摂津・河内・和泉にわたって活動圏をもつ流通にたずさわったことを述べたが、さらに大和・伊賀にも足をのばし（後略）」（五三―五四頁）。そして、そのうえで以下のように述べるのである。

「上島^マ文書の伝えるところでは、その楠木正遠の子正成に妹があつた。彼女は伊賀において観世元成の三男と結婚して、観世正次（観阿弥）を生み、この清次は伊賀小波多（現・名張市）の竹原屋敷に預けられた播磨国揖保庄の永富左衛門六郎の女（引用者注：娘）と結婚した。その間に生まれたのが世阿弥元清だというのである。その世阿弥が足利義満に召されて寵童となり、やがて能を大成する」。

梅原氏は、続けて林屋氏の所論を掲げ、「猿楽の發生に散所の民が大いに関係していること」（一六二頁）を証明するものと述べている。さらにそのうえで、「林屋氏の語る「散所」という場所は、林屋氏以外では柳田國男がこだわった問題である（『毛坊主考』）」として、「シユク神^{しゅくじん}」（宿神）を祀る部落に「クボ・ヤハラ（ヤハタ）・野の者・山の者」がおり、柳田が「クボ」「ヤハラ（ヤハタ）」を「川の民の住した河原」ととらえていることに言及している。⁽²³⁾

このような論旨に立つて、梅原氏は「宿神を祀る民は、境界に住んだ。『川』は自然の境界である。その境界で呪的な行為、即ち悪魔祓いをしたことから『芸能』は生まれたのである」（二六六頁）と述べる。「散所」と「散楽」との関わりについて関心がもたれるが、それは場を改めて考察しよう。⁽²⁴⁾ここで重要なのは、川での呪術的行為から芸能が生まれたという指摘である。もちろんそれが芸能発祥のすべてではなかったはずだが、およそあらゆる芸能の發生に呪術的な要素が関わっていたことは、さまざまに論じられて久しい。⁽²⁵⁾

三、池島と漫才

右のような話題から始めたのは、ほかでもない。時代を遡り文化を掘り起こすことは、当然のことながら近現代社会が目进行がちであることの中にこそ貴重な示唆が含まれている実態を、その一端なりとも指摘しておく必要があったからである。⁽²⁶⁾

右に記した池島は、現在の東大阪市の東南部に当たる。東には南北に連なる生駒山の西麓が広がり、南から北に向かって恩智川が流れる。この地域は、西から東に向けて、宝持（傍示）・玉串（玉櫛）・池島と続く一角を占めている。池島と生駒山麓の間には六万寺と呼ばれる広大な寺域が広がっていた。かつては南の八尾市と区別なくつながっていた地域であり、現在もなお八尾市と東大阪市の市境が見定めにくい一帯であるが、この一帯こそは日本の芸能史を通じて最も注目されるべき地域のひとつであった。⁽²⁷⁾

池島は、近代に至ってもなお漂泊芸能と呼ぶべき芸能の供給地である。現今の日本で最も盛んな芸能をひとつだけ挙げるとすれば、それは漫才であろう。現在のこの国の芸能の主流にある「大阪漫才」の始祖として、その名を挙げられるのが玉子屋円辰である。⁽²⁸⁾ 本名は西村為吉。池島に生まれ、大阪市街の出入口である玉造のあたりまで鶏卵を売りに出かけていた。その折に、滑稽な口上で名をあげ、後には大阪の寄席にも出入りして玉子屋円辰を名乗った。その円辰の創始したのが、現在は「しゃべくり漫才」と呼ばれ、「ボケとツツコミ」から成る大阪漫才の祖型であった。⁽²⁹⁾

東大阪市と八尾市（または、かつての河内郡と若江郡）という河内の中心地が交わる（逆に言えばその境界となる）この一帯に、みなぎる芸能的潜在力もしくは芸能的靈性については、ここでは到底語りつくせないで別の機会を待ちたい。しかし、今里・宝持という「境界」そのものを表わす地から東へと続く玉櫛・池島、さらに東には六万寺が生駒の山麓まで続く一帯に、日本の芸能の源流と呼べる「能」の確立者・観阿弥の母親（世阿弥の祖母）の生地、すなわち観世のふるさとがあったという伝承は等閑視できない。

そこから、現代における芸能の頂点に君臨し続ける漫才（大阪漫才）まで、およそ六〇〇年という間の芸能（体系化・組織化されて以降の日本の芸能の歴史）が、この地域一帯には折りたたまれて存在する。京都という霊性都市を最大の例外として、これほど濃密な通時的芸能空間は、日本全国でも数えるほどしか存在しないだろう。⁽³⁰⁾

以上のように見てくれば、たとえば生駒山中の宝山寺に世阿弥の真筆が複数存在するのは、少しも不思議なことではない。もちろんそれは「生駒山宝山寺が有する数々の寺宝の中で異彩を放つのが、世阿弥自筆の能本を含む金春家伝来の能楽関係の伝書で、第十五代管長隆範和上が金春宗家の兄であった縁で移管されたものです」（白鷹緑水苑HP）⁽³¹⁾ という事情によって、宝山寺の所蔵に帰したわけであるが、そのような「縁」を導く力は、このエリアのもつ芸能の潜在力を度外視しては考えにくい。

玉櫛とは、生駒山の西麓に沿って南北に延びる東高野街道と、その西側に河内平野を横断するように南北に続く河内街道、さらには生駒山を越えて東西（大和と河内）を結ぶ幾本もの生駒越えの街道の中でも最も古い歴史を持つ地域のひとつであり、通算して最も多くの通過者が

往来したであろう暗越奈良街道と、その南を東西に走る十三越街道という、中近世の主要交通路が交じり合う地点にあった。⁽³²⁾ そのような要衝にあり、むしろ要衝を形成したのが玉櫛という土地である。そうでなければ、稀代の戦略家として名高い楠木正成が、ここを拠点のひとつとする理由はなかっただろう。

その楠木正成の女きようだい（姉もしくは妹）が、観阿弥・世阿弥の母であり祖母であったという伝承は、マージナル（境界的）な芸能者の出自にそぐわしい。足利將軍家の庇護というアドバンテージが当初あつて彼らの存在に脚光が当たったのだとしても、むしろ、それゆえにそぐわしいと言えるのである。⁽³³⁾

以上は日本の芸能史において系譜の両端に位置する能と漫才にのみ言及したが、二十一世紀現在、「伝統芸能」と称し、その最高の担い手を「人間国宝」と呼ぶに至る、そのような付加価値の獲得に至る体制への接近を、最初に実現したのが観阿弥・世阿弥の父子であった。その親子の「里」として、玉櫛以上にふさわしい場所があるだろうか。

中世玉櫛庄以前においても、たとえば延喜式神名帳を徴するに、ここに載つて「式内社」と呼ばれる古社が日本で最も集中しているのが、玉櫛を中心に南北に延びる、この一帯であつた。社寺とりわけ神社と芸能との深く長いかわりについては贅言を要すまい。地域の切り取り方によって密度は大きく左右されるが、それでも奈良や京都ではなく河内の一角が、延喜式神名帳に載る古社の日本一の集積地であることを、そしてその域内に位置するのが玉櫛（玉串）であることを、ここでは改めて明記しておきたい。⁽³⁴⁾

四、境界としての玉櫛

境界を考えるに当たって、網野善彦氏の「境界に生きる人びと」⁽³⁵⁾の次の一文を想起する。「芸能民の中にも、一部は世阿弥のように寺社や幕府との関係を保ちながら、広く公衆を対象とした芸をみがき、社会的な地位を保った能役者のような場合もありましたが（中略）この転換が賤視の方向に向かつての大きな転換になっていったことも事実といわざるをえません。」（四七頁）

すなわち、「商工業者・金融業者のように富の力によって社会的地位を確保できた人びと」と並んで、「呪術的な宗教民・芸能民、とくに遊女・傀儡さらに非人のように、聖俗の境界にいると見られていた人々」は、南北朝の動乱によって引き起こされた社会的転換、天皇の權威の

失墜に連動した寺社權威の低落（「それまで職能民・境界的な人びとの依存していた權威そのものの低落」四七頁）によって「聖視」を失い、もっぱら「賤視」の対象となつてゆくというのが、網野氏の描いた見取り図であつた。

「まさしく境界的な人びとである悪党・海賊・職能民や非人をふくむこれらの人びと（商工業者・金融業者などの職能民や禅僧・律僧・上人・聖などの新しい仏教、僧侶たち）の爆発的な動きの中で、まず鎌倉幕府が後醍醐天皇によって倒され、その後醍醐の建武新政も、二、三年後に崩壊し、南北朝の動乱が六十年にわたつて続く。」（四六頁）と、続けて網野氏は述べている。

中世に発するそのような「賤視」、すなわち「差別」が、「江戸幕府によって制度として固定化されていく」（四八頁）というのが網野氏の近世観であつた。この点のみに焦点を当てれば凡庸な史観である。そのような「聖別化」から「差別化」への道のりを能楽が免れた（「社会的な地位を保った」とは一概には言えないのだが、それでも観阿弥・世阿弥の父子が能役者の地位保全、すなわち能楽の芸能一般に対しての「聖別化」にあずかつて力があつたことは疑えない。⁽³⁶⁾ 網野氏が「境界」と言い、「境界に生きる人びと」と言うとき、私が想起するのは東大阪市玉串の地理的位相であり、そこに生まれたと伝えられる観阿弥の母のことである。

楠公（楠木正成）の妹とも姉ともいふ彼女が、どのような芸能的素養を有していたかは上嶋家文書からも永富家文書からも読み取ることができないが、彼女が正成に代表される「悪党」の一統に生い立ったとすれば、「境界に生きる人びと」の家の娘であつたことは間違いない。⁽³⁷⁾ ここで多くを述べる余裕はないが、つまり「聖」「賤」はいずれも人間がつくり出した装置であり、そうである限り逆転可能な仕組みであつた。⁽³⁸⁾ 別稿に述べたように、玉串は玉串（玉櫛）川という大河のほとりにあり、かつてここには玉櫛庄という莊園が置かれた。玉櫛という場所が旧大和川の主要な川筋のひとつである玉櫛川の流域にあり、暴れ川を治めるために建てられた川守の社（津原神社＝玉櫛明神）の一带を呼んだ地名であることは、やはり見逃せない。⁽³⁹⁾

暴れ川を治める社地の卜定のために上流（河内野に流れ至つた大和川の河内側の起点）から櫛笥と橘とを流して、それらがとどまつた場所に社を建立するという若宮八幡宮所蔵の縁起は、いかにこの地域が洪水の被害を受け続けてきたかという記録をとどめるものとしても看過できない。そもそも、神意にもとづき洪水の鎮めに最も有効な場所に創建されたわけであるから、その一帯が湿潤な低地であつたことは疑えない。実際、津原神社の本殿の背後には、今もなお神体としての神池が残されていて、旧大和川水系有数の氾濫原として「津原」と名付けられたこの地の、かつての姿（その一部）をとどめている。

そしてまた、「観阿弥の母の里」という伝承もまた、この地がかつて「境界」であつたことを示唆している。玉櫛の西には「宝持」という

地があり、これは本来「旁（傍）示」であつたと考えられる。⁽⁴⁰⁾言うまでもなく、まさしく「境界」の呼称である。

『日本列島に何が起こきたか』には、補論として網野氏と廣末保氏の対談「市の思想」が収められている。⁽⁴¹⁾

それで、市のたつ場所ですが、さつき廣末さんのお話にも出ましたが、境というのは面白い空間だと思うんです。国の境というのは普通の莊園の境よりも、もっと市的性格が強いんですね。平安時代、十世紀ぐらいの史料に出てくるんですけど、そこには「不善の輩（やから）」が往来して困ると書かれている。それは当然ですね。一種の無縁的空間だから。そこで、そこへお寺をいくつも建ててゐるんですね……。 (八六頁)

玉櫛・宝持エリアは「郡の境」であるのみならず、長瀬川（久宝寺川）と玉櫛川によって形成される土地の「境界」であつた。伝承を地名に残す玉串（本来は玉櫛）川は、津原神社の南で大きく菱江川と吉田川に分岐する。そのように、まずこの地は地形的に「旁示」であつた。そして、玉櫛明神（津原神社）の参道には市が並んで、ここはのちに市場村と呼ばれている。神意によって物と物、のちに物と金銭が交換される、網野氏の言う「一種の無縁的空間」としての「市的性格」を強く付与されたのが、この地域一帯の来歴だつた。そのような空間に、社寺が建てられる必然も、また網野氏が論じた通りである。

河内平野を東西に走る陸上交通路によって、私たちは東大阪市の西と東が、北から順に中央大通り（地下鉄中央線・近鉄けいはんな線及び阪神高速道）、産業道路（府道大阪枚岡奈良線）、近鉄奈良線、府道大阪東大阪線という四本の東西交通路によって、緊密に結ばれているというイメージを持っている。しかし、歴史的には布施や小阪（東大阪市西部）は長瀬川によって久宝寺や八尾と、上記の玉櫛や宝持・花園（中部）は玉櫛川によって山本や高安と、そして枚岡（東部）は東高野街道によって京都から高野山まで、いずれも北や南と強く結びついてきた。そして、難波（大坂）や大和（奈良）との東西の交通は、古代以来は大和川水系によって、近世には開削された井路（水路）や暗越奈良街道などの街道によって担われた。

たとえば、大軌（大阪電気軌道。近鉄奈良線の前身）が大正三（一九一四）年に開通する以前、現在の東大阪地域の北側に住む人たちが鉄道を利用するときには、片町線（学研都市線）の放出・徳庵・鴻池新田などの駅へ、そして南側に住む人は関西本線の八尾・久宝寺といった駅まで歩いたという話を何度も聞いた。⁽⁴²⁾それも、東西方向よりも南北方向に強い地域的紐帯を結んだ当時の空間感覚に従って理解できること

と思われる。無論、当時の徒歩に対する抵抗のなさ、片道で一里（約4km）や二里は当たり前前に歩くという生活習慣の中で理解すべきことはあろう。

そのように、かつての河（川）を基準に地域（地域性）を考えるならば、現在の東大阪市域（かつての中河内郡から、布施・河内・枚岡の三市体制を経て現在に至る）は、四本（あるいは五本）の河川によって六つのブロックに分けられる。逆に、川が川沿いの両岸を帯のようにつなぐもの（地域を編成するもの）と考えれば、西から順に長瀬川エリア・楠根川エリア・玉櫛川エリア・恩智川エリアと生駒山エリアの五つ、あるいは玉櫛川が菱江川・吉田川という二つの川に分岐することを考え合わせるならば六つのエリアに分けられる。⁽¹⁵⁾

もちろん旧大和川の主流であった長瀬川・玉串川に比べ、楠根川・恩智川は中小河川にすぎず、この分割がバランスを欠くという意見もあるだろう。それでもなお川舟や橋によって渡る明確な「境界」としての河川は、現代の私たちが思う何層倍も強く、かつての「地域」を画してきたのである。⁽¹⁶⁾

五、今里——もうひとつの境界

ここでもうひとつの境界について見ておきたい。現在は大阪市東成区と生野区に属する今里についてである。⁽¹⁷⁾なぜ東大阪市の「外」に目を向けるかは後述する。

平野川^{ひらの}（宝永元年に旧大和川が付替えられ、その支流であった旧平野川が新大和川となった流れ）は、今里の西側をほぼ南北に流れていた。つまり本来平野川の東にあり河内の内であった今里界限（現・東成区。平野川の東一帯）は、さらに東に平野川の分水路（城東運河）が開削されてからは、ここから東が河内と考えられたために摂津の内に取り込まれた。

今里が境界であることは、他にも徴証がある。玉造の二軒茶屋（つるや・ますや）で旅装を整え、猫間川に架かる石橋（本来は黒門橋。慶安三〇一六五〇年ないし宝永八〇一七一年より石橋であったと伝えられる）を越えた所からが、いわゆる城外（大坂城黒門外）であった。

平野川沿い（西岸）の八坂神社に残る明治三十五（一九〇二）年の里程標は、明治九年に奈良街道の起点が高麗橋に移ってからのもので、それまでは玉造（黒門、石橋）が街道の起点であった。そこから東へ、ほぼまっすぐに進むと六分の一里（六五〇メートル）ほどで平野川

〔百済川〕を渡る。そこに架けられているのが玉津橋であり、玉津橋は「玉の橋」とも呼ばれた。「玉津」の「津」を、「沖津白波」のように所属を示す助詞（現代語では「の」と理解したのであろう。「玉」は美称であり、「津」は「湊（みなと）」の意味である。ただし、ここでは河川のミナト（舟着場）を表わすのか、助詞「つ（の）」なのかは明確ではない。すなわち「玉津橋」とは「玉のように美しい橋」の意味、あるいは「玉のように美しい舟着場の橋」の意味である。いずれにせよ、大和川付替え以前のこの近辺は、輻輳する舟々で賑わっていたことだろう。平野川もその支流となる旧大和川には、やや東に「玉川」と呼ばれる場所もあって、「玉櫛（玉串）川」の「玉」もまた美称の意味を含めて呼ばれていたものと考えられる。

江戸時代初期の寛永十三（一六二六）年には、旧大和川が大和盆地から亀の瀬溪谷を越えて河内平野へと流れ出た所にある柏原から、大川に流れ至る八軒家（現・天満橋近く）までの間を、柏原舟や剣先舟と呼ばれる輸送舟が行き来するようになった。つまり旧大和川の支流の中でも平野川が最初に輸送路として選ばれ、インフラとして整備されたのである。それは大坂三郷（市街地）との位置関係によるところが大きかったわけだが、暗越奈良街道との結節点に当たる玉津橋の橋詰にも、多くの舟々が停泊したことは容易に想像できる。

なぜ、すでに河内ではない地域のことを詳細に述べてきたかといえば、この「もうひとつの傍示（境界）」である今里もまた、日本有数の「芸能のまち」であったからである。上記のような水陸の交差点である今里（片江）には「片の町」と呼ばれる芸人の町があった。現在の近鉄奈良線今里駅の北、駅の東側を流れる平野川分水路沿いの西側である。奈良街道からは、やや南に下った場所に当たる。東成区住宅と呼ばれる決して裕福な人の住む地域ではなかったが、ここにはかつて数多くの芸人たちが住んだことで知られている。

近代漫才の祖と呼ばれる玉子屋円辰が、池島（東大阪市南東部）から奈良街道を通って鶏卵の行商に赴いたと伝えられているのは、今里からそれほど近い玉造であった。今里から玉造までの距離を、東に向かえば深江があつて、そこは暗越奈良街道を東へと向かう人々が「深江編笠」と呼ばれる旅笠を買い求める場所であった。言い換えれば、そこは出発の儀式がなされるべき「境界」であった。つまり、かつての城内・城外の境界である玉造の東に、平野川という摂津・河内の境界に沿う今里があり、その東には平野川分水路という新たな境界が設けられて、それを東へと渡ったところが深江である。このように、今里界限とは幾筋もの境界が重層した境域として近代まで人々の記憶に残り続けてきた。

その中には、玉造城外の石橋と平野川に架かる玉津橋のように、古い境界が忘れられ、新たに更新されるという幅広い時間軸を含んだ境界があり、平野川分水路（城東運河）という近代になって出現した境界もあった。そのような境界性と、芸人（芸能者）のまちの成立とが全くの無関係であったとは思えない。むしろ大いに関係があつただろう。

このように、かつての記憶を伏在させつつ、むしろ近代に至って境界性を顕わにした土地が今里なのであった。今里新地の形成が、このような事情と深く関わっていたことは想像に難くない。今里出身の知人に、新地には足を踏み入れないように親から強く言われて境界を強く意識したという幼時の回想を聞いたことがある。また、今里界限が平野川と平野川分水路によって挟まれたことも、おのずからこの地の境界性を高めたことだろう。いわば、近代に至って新たに「河内」が発生したのである。

その頃すでに深江の境界性は消滅しつつあったが、「笠」が日常生活の中から失われるのは、しばらく後のことである。とりわけ祭礼に深江笠の需要が大きかったことは、『東大阪市の昭和』を編集する過程で地域住民へのヒアリングによって確認することができた。⁽⁵¹⁾

平野川の右岸（今里にとって内側）に心理的境界としての大今里墓地があり、常善寺があった。そして、今里ロータリーは交通量の増加によってロータリーから五叉路へと移行したあとも、依然「ロータリー」という名で呼ばれて現在に至る。⁽⁵²⁾ここが排気ガスによって日本一汚染された空間であったことも、おそらく近辺に住む人たちの意識をある方向へと導いたことだろう。

その時期、河内とは、あるいは東大阪市とは、光化学スモッグに象徴される大気汚染を滞留させる大きな壁（生駒山）を東に控え、その麓を日本一汚染度の高い恩智川が流れ、西には日本一大気汚染のひどい今里ロータリーがあるという、今では考えられない環境下に置かれた、いわくつきの場所であった。昭和四十二（一九六七）年の三市合併直後から五十二万あった人口が、五十三万を前にして減少に転じ、そのままだげ止まらない動向も、環境不全・社会不安が今もなお記憶の底から払拭されていない集団心理を考慮に入れる必要がある。⁽⁵³⁾

大阪市内でありながら大阪環状線の外にあり、平野川と城東運河に東西を画され、大今里と新今里という、いわば南北問題を抱えた今里という地域が、幾重にも境界性を内蔵した場所であったことは間違いない。日本の国学の祖と呼ばれる学僧・契沖が、この地に約十年間腰を据えて国学の基礎を築いたことも、境界が有する「うつほ（密閉空間）」⁽⁵⁴⁾すなわち文化的潜勢力ゆえのことと言えば、さすがにうがち過ぎであらうけれども、では境界ゆえの「力」が何もなかったかといえは、それも正しくはあるまい。

いずれにせよ、東大阪市を考察することは、すべからず周辺地域をも含めた考察が必要である。その一環として、現在は河内域内でもなく、また東大阪市でもない今里を取り上げて考察した。

六、近代への架橋―河内音頭

河内の夏は、河内音頭の太鼓の音によって本格化する。七月から九月にかけて、河内音頭の流れない週末はない。近代への「継承」の一端を述べるために、ここでは河内音頭を取り上げる⁽⁵⁵⁾。

河内音頭研究の第一人者として知られた村井市郎氏の河内音頭の起源説は以下の通り。

河内音頭の元節が、「交野節」と通称されていることからわかるように、この音頭は、もと河内ノ国の北端にあった交野郡という郡内で発生し、幕末・明治から大正・昭和にかけて、北河内、中河内から大阪市内に、あるいは淀川を北に渡って旧三島地域に、また山なみを東に越えて奈良県の生駒谷へと広まったものであります。

河内音頭の発祥（起源）には諸説があり、それぞれの説に基づいて伝播（流布）の経緯と様相は異なってきた。特に八尾・常光寺の流し節説は有力であるが、ここではそれらの当否は問わない。最も遡って六〇〇年の歴史があるとされるが、この起源説が先述の能楽とほぼ重なることを確認しておきたい。

村井氏も、「その起源については、定かな記録は何も見つからないのでよくわかりませんが、筆者の調べでは、どうも江戸時代中期から後期に移る頃にできたものではないかと思われます。」と述べている。そして、その上で北河内の旧家に残る寛政元（一七八九）年の「交野之八箇村申合書」を根本的な証左として取り上げたのである。

寛政元年といえ、大坂から豊後浜之市に輕業や操り・物真似、そしてさまざまな珍獸をはじめとする見世物が興行を打ち、賑わっていた時期である⁽⁵⁶⁾。興行先は、もちろん浜之市だけではなく、西日本各地で大坂の芸人（芸能者）たちは種々の興行を打っていたのであり、大坂での興行の圧力（盛行の活性度）が高くなればなるほど、日本全国津々浦々への波及度と浸透力も高まって行ったものと考えられる。河内交野の「申合書」と豊後浜之市の文書とは、そのことを裏付ける、おびただしい事例の中の一つずつであった。

「幕末頃になると、浄瑠璃や説教節、祭文やチョンガレなど、語り物芸能の流行普及の影響を受けて」（二六一頁）、農閑期などに「座敷音頭」が行なわれ出したという。つまり、祭礼時に限らず芸能が披露されるということであり、この点はおそらく全国各地で類似の展開を呈したの

であろう。一般庶民の食事がそれまでの一日二食から三食となり、「お蔭参り」に代表される物見遊山が（限られた期間ではあるが）常態化して、農民の行楽が当たり前になってきた頃、祭礼時のみならず、また特定の身分の者に対してだけでなく、寄席（常席）またはそれに近い場が提供されるようになったことは、芸能の普及とともに専門職化が進んだことをも意味する。⁽³⁷⁾

河内の場合、明治初年の北河内（茨田郡野口村＝現・門真市）の歌亀（中脇久七）などは、そのような趨勢の中で専門職となった一人であろう。ことは音頭・音曲に限らず、中河内でも大阪漫才（しゃべくり漫才）の祖と呼ばれる上記の玉子屋円辰が登場してくる。⁽³⁸⁾

「この種の音頭が時好に叶ったか大いに受けて、北河内での盆踊りや座敷音頭だけでなく、大阪市内の演芸の席や中河内にも進出し（中略）元節である交野節と渾然一体となって広がって行きました。」（二六一頁）そして、明治二十年代前半の頃、「江州音頭」に伍して、「河内音頭」の名称が一般化した。先に、「玉子屋円辰」の名を挙げたが、彼もまた当初は江州音頭由来の音曲に乗せて玉子売りの口上を演じたのであり、一部には河内音頭取りの流れを汲んだと称する評価もある。⁽³⁹⁾

東に生駒山、その生駒西麓にひろがる六万寺という宗教都市（少なくとも仏教空間）を控え、西隣には世阿弥の母の里・玉串が立地する。東高野街道と生駒越えの奈良街道が交差する条里制の田園・池島から、暗越奈良街道を往復して城内と城外の境界である玉造で玉子売りの口上を演じた円辰が寄席芸人へと進む契機は、いわば境界を越えてゆく彼の移動の内にあり、それは彼の日常の再現ですらあった。河内池島の玉子売り「西村為八」は、河内池島から摂津玉造への往還の過程で「為八」から「円辰」への変身を繰り返したのである。

たとえば河内とは遠く離れた九州の浜之市を瞥見することで、河内平野に生い立った芸能民たちが、近世という時代には広く西日本（さらには中部日本から東日本にかけて）興行して回った姿を浮かび上がらせる。そのような芸能の普及・伝播の経緯には、この地域が蔵する芸能の「力」が並々ならず関与していたからにはかななるまい。そのようなインパクトの背景、さらには「芸」というボルテージを支えたものが何であったのか。本稿では、その一端を見てきた。

古代の渡来系芸能民、中世の観阿弥・世阿弥、そして近代の玉子屋円辰などは、それぞれに点として存在するのではない。右にその一端を瞥見したように、それらは線として互いに結びつき、近世以降は大坂に集約される形で連綿と芸能者を供給し続けたのが河内なのであった。それは、はからずも二〇二〇年のNHK連続テレビ小説（大阪局制作）『おちよやん』が、南河内から大阪市内へと「供給」される芸能者を描いていたとおりである。⁽⁴⁰⁾

精霊供養に由来する沖繩のエイサーが、この半世紀のあいだに「舞」から「踊」へと大きく変貌を遂げるような急激な変化を考慮に入れ、

よさこい節とソーラン節が学校教育の中で融合を加速させるような社会現象を見るにつけ、今日芸能を考察することの困難さを痛感するが、むしろそれは、かねてよりの変遷を早回しで見ることを意味しているとも言える。そう考えれば、現代こそ芸能や舞踊といった身体技能を考察する絶好の時宜なのではないかとも思われるのである。⁽⁶¹⁾

七、おわりに

川は、川のみで存在することはなかったし、これからもないだろう。川が境界（移動の障壁であり土地の目印）である時代はもとより、舟という手段によって交通路となった時代、そして社会の浄化装置とされた時代、魚介の供給源となった時代など、川は人間によって何らかの役割を与えられて「川」となる。現在もお、七夕の「送り」や所によっては未だ精霊流しも行われていて、「川のように水が流れているよ」なところ、河原や道のような開かれた空間では穢れが伝わらないのです。」（『日本中世に何が起きたか』一五七頁）という川本来の機能を受け継いでいる。「水に流す」という成語や「禊^{みそぎ}」という比喩もまだ生きている。

そのような、むしろ目に見えないものを「流す」役割、あるいは「穢れ」を祓う役割を持ちつつ、川の最大の利用価値は「道」と重なってゆく。ある地点とある地点を「つなぐ」役割である。⁽⁶²⁾その役割を大きく負担したのが、「悪党」であり、「海賊」であった。⁽⁶³⁾

川を、ただ川として十把一絡に見てはなるまい。たとえば、通称「くらわんか舟」が蜷集していた淀川ではあるが、川幅約七百メートルの枚方（北河内）と対岸の高槻（摂津三島）との間では、昭和五（一九三〇）年に長さ六九四メートルの枚方大橋が竣工するまで、ほとんど交通・交流がなかったとされる。⁽⁶⁴⁾

武田俊哉氏は、「淀川を介した両都市（枚方・高槻）の学校誘致・教育文化活動は、ともに関連したものであったことが想定される」「沿線の文化的向上を期待した文化学術のまちづくり」（三〇四頁）などと淀川兩岸に共通した教育・文化政策、すなわち兩岸の文化的な共有性が実はここ百年ほどの間に醸成されたものであったことを示唆する。ただし、この地域の教育・文化への積極的な取り組みが（北岸のみならず南岸でも）京都との紐帯、京都からの影響を大きく受けて内発的に生じていたことは明らかで、その点は決してここ百年程度の短いスパンの中での現象ではない重要な要素として見逃すことができない。

司馬遼太郎が「醜」（しこ）とは「力」のことであり、それも一般人の常識をはるかに凌駕した巨大なエネルギーのことであると論じたことは未だに記憶に鮮明である。⁽⁶⁶⁾ その「力」ゆえに後世「醜」は忌避されるに至ったのであるが、「悪」もまた当初は、人知の及ばぬ「力」のことであった。それらは、しばしば共同体を揺さぶり、破壊する元凶ともなった。それゆえに、次第に忌避され、人々の意識の中でダークサイドへと追いやられた。

「悪党」に関していえば、河内は明確に二分される。⁽⁶⁶⁾ 南河内から中河内にかけて、楠木党に代表される悪党たちの跋扈した「悪党エリア」と、北河内の「非・悪党エリア」の二つである。北朝が正統とされていた間には「史上稀に見る（天皇家に弓を引いた）反逆者」であった楠木正成の姿は、南朝が正統となつて「史上稀に見る忠臣」へと一八〇度評価を変えたが、河内を最奥部で支える金剛山地、千早・上下赤坂の三城をはじめとする史跡に満ちたこのエリアは、まさに悪党のイメージで色濃く染め上げられている。⁽⁶⁷⁾

「醜（四股）」を力の源泉とする者たちは「力士」と呼ばれて国土の動揺を鎮め続けている。⁽⁶⁸⁾ 「荒ぶる」を合言葉に心身の鍛錬を続けてきたラグーマンたちもまた同系の者たちであることを、二〇一九年に多くの日本人が知ることとなった。

ラグビーと中小企業（製造業）は歴史的な経緯の中で、実は深く強くつながっている。それらを別々のものとして扱うのではなく、ひとつのものとして止揚できるのは、やはり「文化」の観点しかない。根源的な意味での「醜」や「悪」から目をそらすことなく、この地域がいかに瞠目すべき文化資産に満ちているかを、引き続き検証していければと思う。

以上、いささか総花的な論及となったが、東大阪市の持つ文化的な潜在力の一端を示し得たものと思う。ラグビーワールドカップ（RWC）二〇一九日本大会が終了し、新型コロナウイルス禍とも相まって、東大阪は次の目標を見定めがたい状況にある。願わくば、本稿が何らかの示唆を含むものであれば幸いである。

【付記】

以上は、大阪商業大学アミューズメント産業研究所 平成二十九、三十年度研究プロジェクト「東大阪市の文化力（カルチュラル・パワー）に関する歴史地理的研究―花園ラグビー場を中心に、二〇一九年RWC（ラグビーワールドカップ）に向けて―」（研究代表者…石上 敏）による成果の一部である。同助成に対して、筆者は先に拙稿「暗越奈良街道と芭蕉―東大阪市における文化の論として、松原宿を中心に―」（『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』第三二号、二〇二〇年七月）を公にした。ただし、未だ述べ足りない部分は多く、該論文

は東大阪市の一部である松原宿と暗越奈良街道の考察に終始し、包括性に欠ける嫌いがあった。その欠を補うためにも、改めて本稿を成した次第である。

同研究を遂行するうえで、大阪商業大学アミューズメント産業研究所及び学術研究事務室の関係各位には大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。

注

- (1) 一部、昭和四十五年統計が五〇万一七三人であることからの推計値を含む。なお、最新の登録人口総数(令和三年三月二十八日)は四八万五一〇一人、推計人口(同年三月一日現在)は四九万八一九人である(東大阪市政府管理部情報政策室情報政策課「人口の動き」による)。
- 東大阪市HP参照。 <http://www.city.higashiosaka.lg.jp/>
- (2) 人口統計は総務省統計局HPによる。 <https://www.stat.go.jp/data/index.html>
- (3) 拙稿「東大阪市論—ラグビーワールドカップが東大阪市で開催されるべき理由」(『大阪春秋』第一五三号、二〇一四年一月)。
- (4) 注(3)の拙稿「東大阪市論」参照。
- (5) 拙稿「生駒山の位相—アミューズメントエリア形成の前提として—」(『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』第一八号、二〇一六年六月)。
- (6) 拙稿「古代以前の河内—三世紀を中心に、「モノ」とのかかわりに着目して—」(『大阪商業大学論集』第一五卷第三号(通号一九四号)、二〇二〇年三月)。なお、赤坂憲雄『境界の発生(講談社学術文庫)』(講談社、二〇〇二年)参照。
- (7) 上嶋家文書は昭和三十二年(一九五七)に「発見」された、現在の伊賀市在住上島剛氏所蔵に与る観阿弥・世阿弥に関わる系図を主体とする文書。吉川英治『私本太平記』(毎日新聞社、一九五九年)、杉本苑子『華の碑文—世阿弥元清—』(中央公論社、一九六四年)などによって広く世に知られるに至る。
- (8) 梅原猛『うつば舟Ⅱ 観阿弥と正成』(角川学芸出版、二〇〇九年)。以下、引用箇所は本文中に頁数を以て示す。
- (9) 表章『昭和の創作「伊賀観世系譜」—梅原猛の挑発に応えて—』(ベリかん社、二〇一〇年)。
- (10) すでに大和が出身地であるという『世子六十以後申楽談儀』の記述があったゆえであるが、そこには河内の文化に対する貶視が長く続いた影響がなかったとは言えない。拙稿「河内と能—中河内を中心に—」(『大阪商業大学論集』第二二卷第四号(通号一四八号)、二〇一七年二月)。以下、引

用文中には適宜（ ）に括って注記を補記する。

- (11) 『太平記』は、長谷川瑞校注『太平記①』④（新編日本古典文学全集五四・五七）（小学館、一九九四・九八年）を主に参照した。
- (12) 渡辺水軍（党）の「渡」の文字が「川の民」を意味する「ワタリ」である（二六頁）といった徴証より、そのような「川の民」が玉櫛にもいたと梅原氏は想定している。なお、玉櫛から「信貴ノ毘沙門」すなわち信貴山朝護孫子寺までは、高安（河内）側も三郷（大和）側も麓まで河道（水運）によって結ばれていた。玉櫛の水運については、藤井直正『郷土史のたのしみ』（財団法人東大阪市文化財協会、一九九七年）を参照。
- (13) 『更級日記』の作者「菅原孝標女」で知られるとおり、「女」は「娘」のことである。
- (14) 「鎌倉時代の初めに上嶋は河内の玉櫛庄から伊賀へ入った」（『観阿弥と正成』二六頁）と梅原氏は記す。上嶋家がいつから玉櫛にあり、どのような家格を有していたか、それは現存史料の範囲からは判断できないが、伊賀における上嶋氏の来歴は、玉櫛時代を類推させる。なお、津原神社（玉櫛明神）に関しては注（6）の拙稿「古代以前の河内―三世紀を中心に」、「モノ」とのかかわりに着目して―にて考察した。
- (15) 拙稿「河内の古代―千歳を待ちて澄める河」の解釈を中心に―（『大阪商業大学論集』第一三巻第四号〈通号一八八号〉、二〇一八年二月）に関連する考察を記した。なお、楠氏の勃興以前に用明天皇（五八八年没）の名「橘豊日」の用例がある。
- (16) 金春信高『動かぬ故に「能」という―金春家能面五十撰』（講談社、一九八〇年）など参照。
- (17) 秦氏については大和岩雄『秦氏の研究―日本の文化と信仰に深く関与した渡来集団の研究』（大和書房、一九九三年）、同『続・秦氏の研究―日本の産業と信仰に深く関与した渡来集団の研究』（大和書房、二〇一三年）など参照。ちなみに、「秦」の名を残す京都太秦は映画村で広く知られるが、それは中河内（東大阪市）の帝国キネマ長瀬撮影所が焼失移転したことに由来する。なお交野については、近時、拙稿「河内と東北―坂上田村麻呂の影」（『大阪商業大学論集』第一六巻第四号〈通号二〇〇号〉、二〇二二年二月）にいささか触れる機会があった。
- (18) 多摩六都科学館監修『夜空と星の物語 日本の伝説編』（バイインターナショナル、二〇一六年）など参照。
- (19) 浅尾直弘「近世の身分とその変容」（朝尾直弘編『日本の近世 第七巻 身分と格式』中央公論社、一九九二年）。
- (20) ただし、当時大阪の中心が河内であったという事実から見れば、これはむしろ正確な表現である。
- (21) 『角川日本地名大辞典27大阪府』（角川書店、一九八三年）など地名辞典、また石上監修『東大阪今昔写真帖』（郷土出版社、二〇〇七年）参照。
- (22) 林屋辰三郎『南北朝』（創元社、一九五六年）二章「楠木正成」参照。引用は林屋氏『朝日文庫 南北朝』（文庫版あとがき）二〇〇五年より。梅原猛氏の『観阿弥と正成』に引用された林屋辰三郎氏の楠木正成観、中でも「散所の長」（二五七頁）という一言は、まさに芸能民の拠り所と楠

木正成という人物の「存在」(むしろ「現象」と呼ぶべきか)との重なりを言い表わしている。

- (23) 柳田國男「毛坊主考」(『郷土研究』大正三年三月〜同四年二月)は、単行本未収録。ちなみに、琉球開闢の地と伝えられる沖縄本島の南部海岸に「ヤハラヅカサ」という地名が残る。「ヤハラ」は「タカマガ(ノ)ハラ(高天原)」と同様、天上世界とのつながりを示すであろう。「ツカサ」は主に八重山地方で用いられる巫女の呼称であり、「ヤハラ」は柳田の言う「ヤハラ(ヤハタ)」との関わりを持つと考えられる。また、「ヤハタ」は「八幡」との関わりを介して「ヤワタ」(八幡信仰)を想起させる。秦氏との関わりという意味でも八幡信仰は注意すべきである。

- (24) 散所に関しては、世界人権問題研究センター編『散所・声聞師・舞々の研究』(思文閣出版、二〇〇四年)に詳しい。

- (25) たとえば、太秦広隆寺の牛祭に示現する摩多羅神を、金春禪竹は猿楽の芸能神(宿神)としている(『明宿集』)。

- (26) 現在は「宝持」という表記に改められているものの、かつて境界を示す「旁(傍)示」と呼ばれたエリアに隣接する玉串(玉櫛)が、玉櫛川という自然の境界さらには端的に「河原」に住まう人々の場所を指してこのように呼ばれたことは間違いないことであつただろう。

- (27) 注(3)の拙稿「東大阪市論」など、『大阪春秋』一五三号(特集「東大阪とは何か、二〇一四年一月」)所収論文参照。

- (28) 大阪商業大学商業史博物館編『おおさか漫歩』(同博物館、一九九五年)参照。池島墓地には、吉本興行の創始者・吉本泰三に影響を与えた岡田政太郎(NHK朝の連続テレビ小説『わろてんか』に登場する「寺ギン」のモデル)とともに円辰の墓が現存する。

- (29) ただし、玉子屋円辰の事蹟には、未だ知られていない部分も多い。本格的な評伝が待たれる。

- (30) いま自分で思い返してみても名状しがたい熱情に押されるように、津軽から八重山諸島まで日本各地を歩き廻り、「芸能は辺境に吹き寄せられる」という確信に近い実感を得てから、すでに二十年が経つ。土地が連続していたとしても辺境(境界)は存在し、すなわち辺境は「そこ」にも「ここ」にも存在するというのが、その後の二十年、特に約十年間を河内の跋涉に宛てることのできた現在の私が抱いている実感である。芸能は確かに辺縁に成立するが、中心と言える場所にも成立する。そのことを切実に学んだ二十年間であつた。

- (31) 白鷹緑水苑HP参照。https://hakutaka-shop.jp/

- (32) 北に清滝街道、南に亀の瀬越えの奈良街道・長尾街道、竹内街道など河内と大和をつなぐ街道を控え、中世から近世にかけて最も賑わったのが十三街道、そして近世後期には暗越奈良街道であつたと考えられる。【付記】の拙稿「暗越奈良街道と芭蕉」参照。

- (33) 梅原氏の『観阿弥と正成』の意義は、従来の「上嶋家文書」への評価の沿革とりわけ好意的な評価の流れを丹念にたどり、跡付けていることにある。それも、いわゆる学界の範囲にとどまらず、在野の研究者や作家の作品などを含めて「上嶋家文書」がいかに評価され観阿弥研究に取り込まれてき

たかを丁寧論じている。しかし逆に学界の動向、すなわち「上嶋家文書」がアカデミズムの側にいる研究者たちからいかに無視・軽視されてきたかという経緯への言及に乏しく、そのためバランスを欠いている。ただし、それでもなお『観阿弥と正成』の私にとつての最大の価値は、玉櫛を「玉櫛庄」というひとまとまりの単位から捉える視座、そのきっかけを与えてくれたことである。そして、その視座から「橘」の意味が浮かび上がってくる。

(34) 玉櫛川に沿って南北に連なる現在の八尾市から東大阪市にかけての一带は、平安中期の延長五（九二七）年に編まれた『和名類聚抄』巻九、巻十の「神名帳」に掲載される、いわゆる「式内社」が日本で最も高密度で集中する地域である。範囲の定め方によって密度はある程度左右されるので、「日本で最も集中する地域のひとつ」と述べたほうが妥当ではあるうけれど、河内にそのような場所が存在することは特記されてしかるべきである。それは、旧大和川の主流をなす玉櫛川と長瀬川（久宝寺川）による氾濫を防ぐために、おそらくは奈良時代以降、川を鎮める方図が繰り返しはかれた結果であった。逆に言えば、これほどまでに神威にすぎた地域は他に類例を見なかったと言える。

(35) 網野善彦「境界に生きる人びと」（『駒澤大学仏教学部論集』第一九号、一九八八年。『日本中世に何が起きたか』洋泉社MC文庫、二〇〇六年所収）。境界への考察は、その後、赤坂憲雄『境界の発生（ディヴィニタス叢書1）』（砂子屋書房、一九八九年。講談社学術文庫、二〇〇二年）などに引き継がれる。

(36) 戸井田道三『観阿弥と世阿弥』（岩波新書、一九六九年）など参照。

(37) 永富家文書調査会編『永富家文書目録』（吉川弘文館、一九九三年）など参照。

(38) 沖浦和光・野間宏『日本の聖と賤（中世篇・近世篇・近代篇）』（人文書院、一九八五―一九九二年）参照。

(39) 現在の東大阪市の南縁を形成する宝持・玉串・池島一带とは、別の見方をすれば古代・中世（さらには、近世から近代まで）を通じて、「語る鬼たち」でありつつ「語られる鬼たち」の拠点でもあった。たとえばここは「物部（モノノベ）」の末裔たちが時代を超えて居所（拠所）とした一帯でもあったことを付記しておく。

(40) 「玉串庄」の初見とされる（『角川日本地名大辞典・大阪府』、『小右記』長和四年（一〇一五年）四月五日条「玉串庄人追散辛島牧馬」は、隣接する小野宮家領辛島牧とのトラブルを藤原道長に訴え、その結果「四至」（境界）の確定をしたというものであった。「傍示」は、そのことと関わるかもしれない。なお、傍示の考察は、注（6）の拙稿「古代以前の河内」参照。

(41) 初出は『グラフィケーション』という富士ゼロックスの広報誌（一九八〇年一月号）に収められた対談であった。

(42) 市場で売られたものの中には花卉、とりわけ菊花があった。元禄七年（一六九四）九月九日の重陽の節句に暗峠を越えて奈良街道を大坂（高津）

へと向かった芭蕉は、「菊に出てくらがり登る節句かな」の句を残しているが、彼は約一か月後に亡くなるまで長寿の象徴である菊にこだわり続けた。拙稿「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」考―「枯野」は河内野ではなかったか」(『日本文学』第七〇巻第四号、二〇二二年四月)。

- (43) 舟運については、天野光三・前田泰敬・二十軒起夫「東大阪地域における河川と舟運について(その二)」(『日本土木史研究発表会論文集』第七巻、一九八七年)、注(12)の藤井氏『郷土史のたのしみ』など参照。

- (44) たとえば明治四十二(一九〇九)年に若江尋常小学校(現・東大阪市立若江小学校)に代用教員として勤務するため帝国鉄道(現・JR)八尾駅から寄宿先の薬師寺(東大阪市若江北)まで約五kmを徒歩でやってくる自らの姿を、宇野浩二が『思ひ出の記』に描いている。杉山三記雄氏御教示。
- (45) 現在、東大阪市が行政措置のために策定している市街をA-Gの七ブロックに分ける方法は、この点でも合理的である。ただ、合併五十年を経て、なお旧市(布施市・河内市・枚岡市)の統合(意思疎通)が十全になされていない現状で、従来の区分が妥当なのかは、「平成大合併」による弊害の先駆事例として今後十分な検証と報告がなされてよい。

- (46) 東大阪市の市域(地域としてのまとまり)が、松原宿の宿仕事に宛てられた範囲から近世後期には原型的に形成されていたことを「原・東大阪市」と呼び、拙稿「暗越奈良街道と芭蕉―東大阪市における文化の論として、松原宿を中心に―」(『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』第二二号、二〇二〇年七月)に論じた。

- (47) 川端直正編『東成区市』(東成区創設三十周年記念事業実行委員会、一九五七年)など参照。また、『大阪春秋』第一三〇号(新風書房、二〇〇八年四月)「特集・今里界限」を参照。

- (48) 『柏原市史(本編)』第二巻(柏原市役所、一九七三年)の他、棚橋利光『八尾・柏原の歴史(大阪市史双書)』(松籟社、一九八一年)など参照。

- (49) 平成二十二(二〇一〇)年、東成芸能懇話会によって片江地区(大今里南三丁目一番)に「芸人の町・片江」の顕彰板が設置された。東成区HP参照。 <https://www.city.osaka.lg.jp/higashinari/page/000344274.html>

- (50) 天王寺界限が、まさにそうであったように。難波利三『てんのじ村』(実業之日本社、一九八四年)参照。また、一九七七年建碑の「てんのじ村記念碑」が西成区山王一丁目に建つ。

- (51) 石上監修『東大阪市の昭和』(樹林社、二〇一三年)。

- (52) 今里ロータリーは昭和九(一九三四)年から同三十一(一九五六)年まで二十年余り存在した。姿を消してすでに六十五年が過ぎたが、いまだにこの名で呼ぶ人は少なくない。おそらくロータリーという場所は人々に強い印象を与えるものとして記憶に残り続けるトポスなのであろう。

(53) たとえば東大阪市東南部（旧枚岡市）の生駒西麓に位置する瓢箪山は、「四日市ぜんそく」がそうであるように、現在もなお「瓢箪山ぜんそく」とともに語られる場合がある。近代のイメージが歴史的な文化資産に大きなダメージを与えている一例といえる。

(54) 「うつほ」については、折口信夫『靈魂の話』（『民俗学』第一卷第三号、一九二九年九月初出、『折口信夫全集』第三卷所収）をはじめ、多くの論が備わる。平たく言えば密閉空間のもつ超常的な「力」であり、それが物語や御伽噺の形をとれば、『竹取物語』の竹や『桃太郎』の桃となり、あるいは『浦島太郎』の玉手箱や『一寸法師』の打出の小槌などの形で伝承される。

(55) 村井市郎「河内音頭は、民謡か？」（水野正好・河内の郷土文化サークルセンター編『河内文化のおもちゃ箱』批評社、二〇〇九年。二五八頁以降参照）。河内音頭に關しては、上記の村井氏を始め数々の論究があつて、それらに現在の私が付け加え得るものはほとんどない。ただ、日本列島に広く分布する祭礼舞踊は、大きく「舞」と「踊」に二分されること、「舞」が基本的に平行運動（回転）から成るのに対して、「踊」は垂直運動（跳躍）から成ること、それらが（もちろん例外はあるものの）地域的に見て日本海沿岸と太平洋沿岸に分かれて分布することなどを確認しておく。河内音頭は、その総体的運動形態として回転を軸としつつ、個々の身体運動としては跳躍を取り込んでゐる。まさに「舞」と「踊」の融合形態を今に伝えていると言つてよい。そのことの分析から入らなければ、おそらく河内音頭を理解することは難しい。特に近代に入つて河内音頭は大きく変貌を遂げてきたが、「流し踊り」と「マメカチ」という、一見対蹠的にも見える静と動の所作は、それぞれの由来が「舞」と「踊」であつたことを想定させる。

(56) 五味文彦・吉田信之共編『都市と商人・芸能民―中世から近世へ―』（山川出版社、一九九三年）。また、神田由築『近世の芸能興行と地域社会』（東京大学出版会、一九九九年）参照。

(57) 河内音頭ひとつとっても、芸能の専門職と非専門職との弁別は近年に至るまで困難である。玉子屋円辰が、玉子屋のまま寄席に出演したのか、いつから完全に専門職化したのか、その区別も未詳のままである。たとえば河内音頭の音頭取りと漫才師というジャンルの区分も現代ほど明確ではなく、個人がいくつもの分野を兼ねた場合も少なくなかった。

(58) 「ボケとツッコミ」には、三河万歳が代表例である「太夫と才蔵」や落語の「熊と八」、さらにはその系譜上にある「弥次喜多」など、さまざまな典故が想定される。ただし、これらが系統発生か単為発生かの区別は極めて難しい。

(59) 河内音頭が、実に融通無碍にさまざまなジャンルや伴奏の楽器を取り込んだことはすでに指摘されておりであるが、その「踊り」自体の由来を含めて、まだ多くの謎（課題）が豊かに残されていると私には思える。村井市郎『河内の音頭いまむかし』（八尾市役所市長公室公報課、一九九四年）参照。

- (60) 芸能の興行が裏社会との関わりを深く持ったことは、周知の事実である。このドラマでは、生き別れになったヒロインの父の弟が裏社会に拾われ、入墨を彫った姿で姉の前に姿を現わすなど、間接的ではあるが芸能の裏面を描く工夫が凝らされていた。
- (61) 拙稿「身体論としての日本文学史・序説」(『新見女子短期大学紀要』第一六巻、一九九五年)。
- (62) 北が上であり南が下である地図に私たちは馴致されて久しいが、川上が上であり、川下が下であるという地域意識は長く続き、現在もなお余喘を保っている。河内の場合、近世に出版された地図はいずれも東を上にしており、近代に至ると東(東京)がすべての「上」である鉄道交通が人々の意識を変えてゆく。南北が「筋」、東西が「通」である大坂三郷(市内)や神戸市内、「上ル」「下ル」で南北を画した京都など、方角意識は決して一律ではなかった。
- (63) 拙稿「(総論)河内人の系譜―悪党と善人をめぐって―」(『大阪春秋』第一五六号、特集…河内人の足あと、二〇一四年一〇月)。
- (64) 武田俊哉「八十年前の学研都市構想―大大阪と大枚方―」(橋爪節也編『大大阪イメージ…増殖するマンモス／モダン都市の幻像』創元社、二〇〇七年)三〇九頁参照。
- (65) 司馬遼太郎「河内みち」(『街道をゆく3 陸奥のみち、肥薩のみちほか』所収)。
- (66) 注(63)の拙稿、また『新国記』などを参照。
- (67) 注(65)の司馬遼太郎「河内みち」、また、拙稿「総論―1 河内イメージの形成と展開―河内の文芸史」(注(55)の『河内文化のおもちゃ箱』掲載)参照。正成の存在は、千早・赤坂の高みから流れ下る石川の奔流のように河内平野へと展開した。河内平野をめぐる累代の合戦・内乱の数々は、このエリアの戦略的重要性を示して余りあるものであった。そのような合戦史の中に河内の「悪党」イメージは更新され、時に封印されてきた。
- (68) 拙稿「現代相撲考―重層する神話、その可能性と未来―」(『Gambling & Gaming』第五巻、二〇〇三年)。